

〔書評〕

ジョン・マッキー／ラジェンドラ・シソーディア著
『世界でいちばん大切にしたい会社』

(鈴木立哉訳 翔泳社 2014年)

池野重男

I. はじめに

本書を私が知ったのは、中村秀明「企業を目覚めさせる」(毎日新聞2014年10月8日「水説」)がこの本を好意的に紹介していたことからであった。もっとも、私がここで好意的というのは、そのコラムには、私が本誌前号に書いた論文「学生たちの歴史認識を読む——DVD『戦争案内』(企画・製作 映像文化協会 2006年)と明治政府の富国強兵政策——」の第V節「歴史を観る眼」で歴史を学生たちに考えてもらうための一つの方法として取り上げた、神野直彦著『地域再生の経済学』(中公新書)がそこで並んで紹介されていたことから、私がいい本なのだろうと勝手に思い込んだだけであったのだが。中村氏は、その神野氏の本の中から次のような「スウェーデンの話」を紹介していた——

神野さんは、ストックホルムから約100^{キロ}離れた小さな町を訪ねた。小さな商店街しもなく、住人たちはみな、「田舎だから物価が高い」とこぼしていた。

神野さんが「ここからストックホルムはそんなに遠くない。どうして買い物に行かないのか」と尋ねた。すると、住人たちは言った。「そんなことをしたら地元の商店がつぶれてしまう。商店街が消えて困るのはわれわれ住人で、なかでも車に乗れない子どもや老人だ。だから少々高くても地元の店で買う」

そして、中村氏は、これに続けて、「『そんなことをした』結果が、日本のあちこちで起きた。中心市街地がシャッター通りになり、『買い物難民』が生まれ、地方の人口減少にもつながっている。／地域や住民にとって欠かせない存在に企業を育てる、応援するといった発想を私たちは忘れていたようだ。」と書いている。地域社会のありようとはまったく無関係に企業が儲かるかどうかだけで、立地が、したがって流通システム・経済システムが決められていってしまう今日のありようを批判する視点が、そこにはある。

これと同じような例が日本にもある。たとえば、宮下睦「店が育むコミュニティーの自治」(『生活と自治』2012年10月号)が紹介する、沖縄本島北部にある国頭村の「奥共同店」

である——「1906年。明治時代末期，貨幣経済が本格的に入ったころ」に「外部資本への抵抗」として，つまり「他から入ってきた商店に地域の財産を全部持っていかれるのが嫌で，防衛策をみんなで相談した。その時，個人商店を経営していた方が，店を提供するから集落で運営したらどうか」となって，「以後，赤ちゃんを含め集落住民すべてが株主となり，方針は総会で決定，理事や店の主任など役員は選挙で選出し……利益が出れば住民に還元する」。もっとも，現在は「かつては1300人いた奥の人口は，今200人を切るまでに減少し……若い世代は車で名護市などの大手スーパーやコンビニエンスストアに行き……共同店には買い足しに訪れるのが主で，頻繁に利用するのは車での移動がままならない高齢者だ」という。それでも共同店というものの本質的な役割の重要性から今日において「共同店を地域再生の拠点にしようという動き」が生まれている——「奥から車で約30分，同じ国頭村の与那地区にある『与那共同店』もそのひとつ。／『今は元気で車があればどこにでも行けるけど，将来を考えたなら気軽に遠くに行けなくなる日は必ず来るから』。与那共同店主任の辺野喜オリエさんは自ら進んで主任となった理由をそう話す。……/与那区長の津波敏久さんは『相談は随時。いつでもここでみんな顔をあわせて，何の売り上げが伸びて何が駄目か，どう改善するか，言いたいさ』。店内の相談から生まれたアイデアはたくさんある。例えば，地域の共同作業の報酬（手当）や運動会の賞品はすべて共同店の商品券。現金は外に出さず，地域内で回していくための知恵だ。」

こうした問題意識をもった具体例の一つとしての神野直彦著の紹介の前に，同じコラムのなかで中村氏が今回書評をしようとしているジョン・マッキー氏のことを書かれていたから，私が勝手に好意的に同書を捉えたのであった。

ところで，このコラムにはその前段があって，中村氏は，一週間前の同じコラムでジョン・マッキー氏のことを書いている。それによれば，ジョン・マッキー氏は「全米で自然食品など味と健康にこだわった商品を売り，年間売上高1兆円を超えるホール・フーズ・マーケット」の創業者であり，「『意識の高い会社』を掲げ，社会的良心の追求と収益の向上が両立することを実践している」（「人を大切にする経営」，毎日新聞2014年10月1日「水説」）という。このコラムに続いての先のコラムなのである。先のコラムでは，ホールフーズ・マーケットが「まだ1カ所しか店がなかった1981年」の次のような「事件」を紹介している——

テキサス州オースティンを洪水が見舞い，店は2¹/₂の床上浸水。設備や商品もダメになった。創業者のジョン・マッキー氏と社員は涙を浮かべ，立ち尽くすしかなかったという。

その時，予想外のことが起きた。たくさんの客や近所の人が，バケツやモップを手に集まってきたのだ。そして口々に言った。「さあさあ，仕事に取りかかろう」「落ち込むのはこの辺にして掃除を始めよう」「この店をつぶしてたまるかい」

その後も，店の掃除や修繕を手伝ってくれる人が途絶えることがなかった。

「なぜ，ここまでしてくれるのか」と尋ねると，答えが返ってきた。「ホールフーズ

がなかったら、オースティンに住みたいとは思わないかもしれない」
マッキー氏らは店の再開に向けて奮い立った……

この話に続けて、「詳しくはマッキー氏の共著『世界でいちばん大切にしたい会社』（翔泳社）にある。」とあるのである。たしかに、このエピソードは先の神野氏の「スウェーデンの話」に重なる。それで私の興味を惹きつけたのである。というのは、私のこのところの問題意識・関心の一つは、私の「リスク社会を超えて——現状肯定の発想を克服する」（本誌第63巻第2号 2012年7月）や「脱リスク社会への挑戦」（同第5号 2013年1月）で示したように、この困難な現実の中で新しい社会を構築しようと苦闘している人たちの具体的な実践例を集め、そこから突破口を探ることにあるからである。

Ⅱ. 私の違和感——「オーセンティック・キャピタリズム本来の資本主義」？

で、ジョン・マッキー／ラジェンドラ・シソーディア著『世界でいちばん大切にしたい会社』（鈴木立哉訳 翔泳社 2014年）である。こうした予備知識で私は同書を手にとったのであるが、じつは中村氏の紹介には違和感があった。神野氏の「スウェーデンの話」は小さな村の商店のことであるのに対し、マッキー氏のそれは「年間売上高1兆円を超えるホール・フーズ・マーケット」という大企業なのである。いったいもとの志を貫いて世界的な企業になり得るのか、という疑問が私には抜き難くあったことを白状しなければならない。だから、この本を手取るまでに時間がかかったのである。

そして、私の違和感は当たっていた！

だから、この本の書評といいながら、なぜ私が本書を途中で——全一八章のうちの「本書を推薦する言葉」・「序文」・「序章」・「第一章」・「第二章」まで——投げ出したかがメイン・テーマとなる。

一言で言えば、こんな《ありうべき資本主義》を展開してどんな意味があるのか!? というのが私の本書への感想である。私はいま、《ありうべき資本主義》という表現を使ったが、本書で盛んに使われているのは《意識の高い資本主義、つまり「コンシャス・キャピタリズム」》、あるいは《オーセンティック・キャピタリズム本来の資本主義》（ビル・ジョージ「序文 資本主義を軌道に戻す」 p.vii）といった表現である。

どういうことかという、ビル・ジョージ氏によれば、「ジョン・マッキーとラジェンドラ・シソーディアは、資本主義を原点に引き戻した。本書では、資本主義は、歴史上最も大きな富を作り出せる仕組みであるという実に説得力ある主張が展開される。……他のビジネスのやり方は資本主義のまがい物で長続きするはずはなく、時間が経つうちにいずれ崩壊する。これは二〇〇八年に世界中の経済システムがメルトダウンを起こして、そのあとにいわゆる『大不況』が続く過程で明らかになった通りである。」（pp.vii～viii）「要するに」と、ビル・ジョージ氏は本書の「序文」で次のように言う——

社会あっての企業なのだ。我々が有限責任会社を設立し、営業ができるのも社会がそれを許しているからだ。したがって企業がそうした権利を侵害するような行為をすれば、社会によって一定のペナルティが課せられても（規制措置や法令で破綻を命じられ、営業に一定の制約がかけられるようなことになったとしても）やむを得ない。そのような企業は、自らの行為によって、資本主義社会に認められた自らの自由を放棄していることになるからだ。

p. viii

これは、企業の社会的責任が大きな課題になった今日では真っ当な意見である。ただ、残念なことに、ビル・ジョージ氏がいかに「オーセンティック・キャピタリズム本来の資本主義」を高々と論じようとも、それが現実において機能することなどはない。現実には、「二〇〇八年に世界中の経済システムがメルトダウンを起こして、そのあとにいわゆる『大不況』が続く」のである。だから、「著者ら [ジョン・マッキーとラジェンドラ・シソーディア] は、資本主義を社会の最大の課題を解決する『高潔な力』と呼んでいる。……将来は、マッキー……の考え方が企業を経営する上で広く世の中に受け入れられ、実践され、資本主義が今後数十年にもわたって、繁栄したグローバル社会に貢献する圧倒的な力として繁栄し続けられることを切に願っている。」(p. xiv) というビル・ジョージ氏の願いは、はなはだ根拠が危うい。

Ⅲ. 本書の構成——著者のひとりジョン・マッキー氏による解説

「序章 目覚め」は、ジョン・マッキー氏が「若い時に抱いていた社会民主主義的な考え方からしだいに離れ始め」て「自由競争資本主義に行きあたった」(p.5) 経緯が、氏自身によって書かれている（これ以降は、つまり「本書の残りの部分はラジェンドラ・シソーディアと私の共同作業である」(p.13) である）。

ジョン・マッキー氏は、もともとは「世界を少しでも良くしたいと考える正真正銘の理想主義者で、健康食品を人々に売り、良い仕事を提供する店を運営していけばそれを最もうまく実現できると考えていた」のだが、「この理想は世界が本当に動いている仕組みを……きちんと説明してくれなかった」ので、「何十冊ものビジネス書をむさぼり読んでいるうちに、企業が自由に競争する資本主義、つまり自由競争資本主義に行き当たった。」そして、「心の中で叫んだ」という——「なんてこった。すべて筋が通っているじゃないか。世界は、本当はこういう仕組みで動いていたんだ」(p.5)、と。

ジョン・マッキー氏にとって社会民主主義的な考え方からの世界観の大転換とは、次のようなものであったという——

人類はこの二〇〇年間で、まったく驚くほかないほどの進歩を成し遂げた。自由競争資本主義が、財産権、イノベーション、法の支配、そして憲法の制約に基づく民主的な政治体制と組み合わせると、社会全体が繁栄し、人類（と言っても単に金持ちだけではなく、貧しい人々も含む社会全体を指す）の幸福と安寧が促進される条件が整うことも学んだ。

私は一人のビジネスマンであり、資本家になっていた。そしてビジネス、つまり営利企業と資本主義は決して完璧ではないけれど、どちらも基本的に良いもの、道徳的なものであることを発見したのだった。 pp.5～6

上で見た「最初の目覚め」(p.3)に続く「第二の目覚め」(p.6)が、先に中村氏の紹介にあった一九八一年の「事件」、本書でジョン・マッキー氏自身が言う「一九八一年のメモリアル・デー」である。そして、さらにジョン・マッキー氏の「目覚め」は続くという——「本書ではその一部を紹介したいと思う。」(p.9)

ジョン・マッキー自身が語るところによれば、「本書執筆の主な目的は、意識コンシャス・カンパニーの高い企業の誕生を促すことだ。」で、その「コンシャス・カンパニーとは」具体的にどういうものかという——

①主要ステークホルダー全員と同じ立場に立ち、全員の利益のために奉仕するという高い志に駆り立てられ、②自社の目的、関わる人々、そして地球に奉仕するために存在する意識コンシャス・リーダーの高いリーダーを頂き、③そこで働くことが大きな喜びや達成感の源となるような活発で思いやりのある文化の根ざしている会社のことだ。 p.11

だから、「こういう企業が増えれば、だれにとっても素晴らしい世界が生まれ出されると我々は心の底から信じている。意識の高いリーダーが力を合わせれば、企業と資本主義の持つ途方もない力が解放され、あらゆる人々が目的、愛情、創造性に満ちた人生を生きられるような世界、思いやりと自由、そして繁栄の世界を創り出せるはずだ。これが、コンシャス・キャピタリズムに対する我々 [ジョン・マッキーとラジェンドラ・シソーディア] のビジョンである。」(pp.11～12)

こうして本書の展開が予告される——

第一章では、自由競争資本主義を語る際にどうしても外せない歴史的な視点、つまり自由競争資本主義とはそもそも何なのか？ どうすれば私たちの世界が良い方向へ向かうのか、そして現在これが直面している課題は何かについて解説する。資本主義をめぐる物語を変革する試みに読者にも積極的に参加してもらいたいという「冒険への誘い」でもある。第二章では、資本主義と企業の進化形としてのコンシャス・キャピタリズムについてさらに詳しく説明し、私たちが現在直面している課題に対応し、劇的に素晴らしい未来を約束してくれる仕組みであることを説く。 p.12

私の書評は、先に見たような理由からこの第二章までになるのだが、このあと本書は「第一の柱——[企業の]存在目的」、「第二の柱——ステークホルダーの統合」、「第三の柱——コンシャス・リーダーシップ」、「第四の柱——コンシャス・カルチャーとコンシャス・マネジメント」と、コンシャス・キャピタリズムの四つの柱について一つずつが説明され

る。さらに、三つの「付録」A・B・Cがあり、「長期的にはコンシャス・カンパニーのほうから従来型よりも優れた実績を上げられる理由とその仕組み」・「コンシャス・キャピタリズムと、最近提案されている他のマネジメントスタイルを比較」・「コンシャス・キャピタリズムに関してよく尋ねられる疑問や誤解」(p.13)が展開される。

IV. 「オーセンティック・キャピタリズム本来の資本主義」はどこにあるのか?!

以下では、冒頭に触れた私の違和感と、そこから生じた私の感想、つまり、《ありうべき資本主義》、もっと言えば《どこにも存在しない資本主義》を著者たちは展開しているのだが、いったいそこにどんな意味があるのか!? という私の批判を中心に立論する。

私は、第一章の「資本主義——かくも素晴らしく、誤解され、評判の悪いシステム」のはじめで、いきなり肩すかしを食わされる。

著者たちは、「素晴らしい……資本主義のもたらしたとてつもないイノベーションのおかげで、多くの人々はその苦役[単調な作業の繰り返しだった日常生活のこと]から解放され、活気のある充実した生活を送れるようになった。驚くほどの技術革新は時間と距離を縮め、今や地球の最果ての地まで人間の手がくまなく伸びている。」(p.15)と謳い上げる。その証拠としていくつかの事実を示す——「わずか二〇〇年前、世界の人口の八五%は極貧(一日一ドル未満と定義される)の生活を送っていた。現在その割合は一六%にすぎない。自由競争資本主義は、ほんの数人を潤わせたのではなく、世界中の数十億人の人々に繁栄をもたらした。」・「世界の人口一人当たりの平均所得は、一八〇〇年以降で一〇〇%増加した」(p.17)・「世界の平均寿命は三〇歳に満たない状況が長く続いていたが、この二〇〇年間で六八歳まで伸びた。」・「最近のわずか四〇年間で、世界の栄養失調者の割合は二六%から一三%へと低下した。」・「ほんの数百年前まで識字率はほとんどゼロに等しかったが、現在は世界の成人の八四%が文章を読める。」・「経済的自由の広がりとともに、普通選挙を採用する民主主義の国に住んでいる人々の割合は五三%になった。わずか一二〇年前には、民主主義国家でさえ女性や少数民族には参政権がなかった。」(p.18)、などなど。

しかし、著者たちは、すぐに、次のように留保をつける——

資本主義は、一方で多くのこともやり残した。この素晴らしいシステムが保証している人間同士の協調は、意識のコンシャス・キャピタリズム高い資本主義が完全に達成された状態からほど遠い。自由競争資本主義の根本的な考え方は、この世界ではまだほとんど受容されていない。その結果、人類全体としては、現在よりもずっと豊かで充実した生活を送れるはずなのに、いまだ実現していない。

p.16

つまり、資本主義は素晴らしい成果を上げているが、まだまだ欠陥がある。それは、システムそのもののせいなのではなく、このシステムが「完全に達成された状態からほど遠い」からなのであり、「自由競争資本主義の根本的な考え方」が受容されれば「現在より

もずっと豊かで充実した生活を送れるはず」だ、というのである。

が、この言い方って、ずいぶんと逃げ道だらけで無責任ではないか。

私の抱くそんな懸念のかけらすらなく、著者たちは深く強く嘆くのである——

広く世の中に繁栄をもたらしているにもかかわらず、自由主義的資本主義は知識階級の尊敬をほとんど勝ち得ていないし、一般大衆から愛されることはまずない。なぜこれほどまで多くの人々に嫌われているのだろう。……

資本主義とビジネスは、これまでその本来の姿で、つまりは物語の英雄としてみられたことはなく、ほとんどいつも悪者として非難の的になってきた。……資本主義とは、労働者を搾取し、消費者をだまし、金持ちばかりを優遇して貧乏人に冷たく当たっては不平等を作り出し……コミュニティを分断し、環境を破壊する存在として描かれている。企業家や経営者は、利己心と慾得で動くものだと非難される。 p.20

しかし、である。いまの時代において、はたして著者たちが大層に嘆くほどに「自由主義的資本主義は知識階級の尊敬をほとんど勝ち得ていないし、一般大衆から愛されることはまずない」だろうか？ あるいは、また、「これほどまで多くの人々に嫌われている」だろうか？ 断じてそんなことはない！ そのことは、このところの規制緩和論や「小さな政府」論、あるいは、自己責任論の跋扈を思えば明らかどころである。

にもかかわらず、著者たちがこのように現在の資本主義を嘆くのは、それが著者たちにとっては残念なことに未だ完全な姿ではない——著者たちによれば「意識の高い資本主義コンシャス・キャピタリズムが完全に達成された状態からほど遠い」——からである。そのいくつかを著者たちは示す——「自社の目指すべき真の目的や世の中に与える全般的な影響についての意識が低い企業がまだあまりにも多い。」・「ここ数年、ビジネスとは利益の最大化を目指すべきという考え方が……定着したため、人々との間で心からの信頼関係を築き、密接に関わろうという能力が大半の企業から奪われてしまった。」・「世の中にはさまざまな規制がはびこり、政府の規模と範囲が著しく拡大し……政治とコネのあるビジネスが有利となって競争が阻害されている。」(p.21)

現在の資本主義にはこうした「深刻」な問題点があるが、それらは「私たちが自由を広げ、この地球上でなお極貧の生活を送っている数十億人の人々に尊厳をもたらす、現代社会の果実を提供し続けようとすれば、克服しなければならない課題」(p.22)であるとしても、著者たちにとっては、だから、いっそうの規制緩和——企業にとっての「自由」！——が必要なのであるという展開になるだけの話である。

これに関連して、指摘しておくべきことが二点ある。まずは、著者のひとりであるビル・ジョージ氏が、すでに本稿Ⅱ. で示したように、「社会あつての企業なのだ。我々が有限責任会社を設立し、営業ができるのも社会がそれを許しているからだ。したがって企業がそうした権利を侵害するような行為をすれば、社会によって一定のペナルティが課せられても（規制措置や法令で破綻を命じられ、営業に一定の制約がかけられるようなことになっ

たとしても) やむを得ない。そのような企業は、自らの行為によって、資本主義社会に認められた自らの自由を放棄していることになるからだ。」として規制を認容していたのだが、ここでは一転、それに反対しているという矛盾である。

もっとも、ビル・ジョージ氏に言わせれば、必要な規制とそうでない規制があるのだと言うのかもしれないが、だとすれば、あるいは、だとしても、その判別するのは誰なのが問われなければならない。少なくとも、ビル・ジョージ氏自身であってはならない(はずである)。

それにしても、である。どうして「オーセンティック・キャピタリズム本来の資本主義」は私たちの前に完全な姿で立ち現れないのか? 著者たちによれば、「政府の規模が大きくなってくると、資本主義の突然変異体も成長してくる」(p.28) という――

真の自由競争資本主義では、企業は厳しい説明責任と強力な内部統制を義務づけられる。一世紀以上にわたって、アメリカ経済は、自由競争資本主義が人類すべてに偉大な利益をもたらせることを世界中に示してきた。このシステムは膨大な数の裕福な中産階級を生み出し、「自由競争資本主義は、必然的に一部の特権階級に富を集中させ、他のすべての人々は犠牲になる」という不正確な批判が誤りであることを証明した。

ところが、政府の規模が大きくなってくると、資本主義の突然変異体も成長してくる。純粋な価値を生み出すことも、ステークホルダーからの愛情や忠誠心を獲得することもままならず、したがって市場で競争することのできない企業群だ。こうした企業は、政府の権力を利用して不当に利益を得ながら繁栄してきた。これが「クローニー・キャピタリズム縁故資本主義」だ。縁故資本主義者は政府と癒着し、多くの人々の幸福よりもほんの少数のためだけの、利己的な利益の拡大を優先させてきた。政府の強制力を活用して、他の人々には得られない有利な地位や、自分だけに都合がよく競争相手を邪魔するような規制、市場参入を阻む法律、そして政府に認められたカルテルを確保している。

自由競争資本主義はもともと高潔なもので、民主主義と繁栄にとって絶対に必要だ。これに対し、縁故資本主義は本質的に非道德的なもので、私たちの自由と幸福に大きな脅威を与える存在だ。残念なことに、現在のシステムには、良心に従ってビジネスに携わる人々が腐敗に手を染め、生き残るために嫌々ながら縁故資本主義者にならざるを得ない側面がある。

pp.27~28

なんのことはない。著者たちからすれば、悪いのは、資本主義ではなくて、「『縁故資本主義』という癌」(p.27)なのであって、そのためには、出しゃばる政府を小さくし規制を廃止すればいい、ということになるのである。これは、要するに、「オーセンティック・キャピタリズム本来の資本主義」――「自由競争資本主義はもともと高潔なもので」ある!――に至るためのという正論を装った単なる規制緩和論にすぎないのである。

そして、もう一つの点。「ここ数年、ビジネスとは利益の最大化を目指すべきという考え方が……定着したため、人々との間で心からの信頼関係を築き、密接に関わろうという

能力が大半の企業から奪われてしまった」という著者たちの言い方の無内容さ、無責任さである。そもそも、システムというのは、このケースに関して言えば、企業の能力が全開できるように準備をする基盤である。その基盤があれば、少々のことであってもそこに落ち着くことができるように企業を誘導する——それがシステムというものなのである。ところが、著者たちは、企業にもともとあるはずの「人々との間で心からの信頼関係を築き、密接に関わろうという能力」が「ここ数年、ビジネスとは利益の最大化を目指すべきという考え方が……定着したため [に] ……企業から奪われてしまった」と嘆くだけなのである。もともと備わっているはずの能力が発揮されずに終わってしまっているとすれば、それはそうさせないようなシステムそのもの、つまりは資本主義！ それこそが間違っているのである。

著者たちは、「自由競争資本主義は……人間の知恵と努力を引き出し、向上させ、拡大し、他の人々のために価値を生み出す驚くほど強力なシステムだ。」(p.29)と自慢するのだから、そうならない現実とどう整合させるのかを問われる。が、著者たちは、それは「オーセンティック・キャピタリズム本来の資本主義」ではないから駄目なのである、と嘆くだけなのである。

「オーセンティック・キャピタリズム本来の資本主義」はどこにあるのか？ それに答えるのが、著者たちの本当の課題なのであるが、単にありうべき「真の」資本主義を唱えるだけなのである。

V. 成長至上主義

著者たちは、資本主義について、それが世の中に受け入れられていないと嘆く（現実はまだたくそうではないのだ）が、その理由の一つとして著者たちは「重商主義の『限られたパイ』『ゼロサム』という概念と、自由競争資本主義の『拡大するパイ』という概念を区別しなかったこと」を挙げ、次のように言う――

資本主義に対する今日の敵対意識¹⁾は、すべての限られた資源を公平かつ平等に分配する必要があるという誤った概念に由来している。しかし現実には、資源と労働にイノベーションをうまく組み合わせれば富は驚くほど拡大できる。貧しい人々は、裕福な人々に犠牲を強いなくても豊かになれる。パイそのものが成長すれば、だれもが多くを持てるようになる。この考え方が、富を生み出す資本主義の驚くべき、そしてユニークな能力の中心にある。

p.23

ここには二つのイデオロギーが潜在している。ひとつは、「貧しい人々は、裕福な人々に犠牲を強いなくても豊かになれる。」であり、もう一つは、「パイそのものが成長すれば、だれもが多くを持てるようになる。」である。

いったい、「貧しい人々」が「裕福な人々に犠牲を強い」とは、どんな言語というか

1) 何度でも言わなければならないが、いったい、そんなものが今日において一般的なものとしてあるのだろうか!?

論理なのだろうか。「貧しい人々」が「豊かになれる」には「裕福な人々に犠牲を強い」なければならない、という発想——というか、畏れ——が、ひそかに著者たちにはあるのだろう。現に、先に見たように、間違いなく著者たちは、「『自由競争資本主義は、必然的に一部の特権階級に富を集中させ、他のすべての人々は犠牲になる』という……〔マルクスの〕批判」を意識している。著者たちが「資本主義に対する今日の敵対意識」を異様に強調するのは、ここらあたりにカギがありそうである。そこで、そのことはじつはそんなに大きな問題ではないのだよと和らげて言うために、もうひとつのイデオロギーとして、「パイそのものが成長すれば、だれもが多くを持てるようになる。」という言説が用意されているのである。これは、コップの水がいっぱいになって溢れば富が上から下に、つまり企業から労働者へ、あるいは富裕層から貧乏人へと滴るのを期待する、今日の“トリクルダウン理論”である²⁾。

しかし、地球温暖化問題といい、原発問題³⁾といい、つまりは「成長」主義そのものが問われているのが現代なのである。そのことを思えば、パイの成長＝拡大を無批判に唱える著者たちは、とてもじゃないが、「意識の高い資本主義」^{コンシャス・キャピタリズム}を唱える資格はない。

もっとも、さすがに聡明な著者たちであるから、無限定なパイの拡大のための天然資源の存在は語らない。それどころか、その有限性は指摘する。が、すぐにその枠というか制約は、「企業の創造性」によって取り払われてしまう——

二一世紀の最初の数年間で、私たちは天然資源が限られていることを痛感した。しかし、同時に企業の創造性にも限界がないことに気づき始めている。創造性を大規模に発揮する方法を学び、七〇億人以上の人々が創造のための活力と力を与えられれば、地球上には解決できない問題などなく、克服できない障害などないことを発見するだろう。

p. 52

ここまでくると、もう単なる従来の科学技術信仰でしかない。それをこそ疑わなければならない時代なのであるのに、である。ここには著者たちの「意識の高い資本主義」^{コンシャス・キャピタリズム}信仰の皮相さが露呈している。

そして、もうひとつ。これについて著者たちには巧妙な逃げ道が——いつもながらだが——用意されている。つまり、問題を起こすのは「意識の低い企業」^{ロー・コンシャス・カンパニー}であり、「自社の存在目的や世の中への影響について経営者の意識が低い」がために「意図していなかった数

2) ちなみに、私にこの本の存在を教えてくれた中村秀明氏の「水説」(毎日新聞)は、その11月19日のコラム「目をそらさないで」のなかで、この「『トリクルダウン』の考えは、すでに1週遅れの経済政策になっている」と正しく指摘をしている。

3) 著者たちが反原発・脱原発の立場にないことはその成長志向から明らかであるが、さらには、「原子を分裂させると、一見取るに足らない粒子の中に隠されたすさまじい力が解き放たれる。コンシャス・キャピタリズムも同じだ。これまでどの会社もできなかった方法で人間の可能性の活用を約束してくれるのだ。」(p.52)といった比喩の使い方からも推察できる。

多くの有害な結果を招く」(p.23)。具体的には、「意識の低い企業」は「利益の最大化を目的としているので……短期的には物質的な繁栄を謳歌できるかもしれないが、長期的には制度上の問題が顕在化し、それに対処するためのコストはとうてい支払えないほどに上り上がっていく。あまりにも多くの企業が、環境に対する影響はもとより、地球上に棲息する野生動物や家畜動物などの他の生物と社員や顧客の身体や精神への甚大な影響を認識しなくなる。」(pp.23～24)

だから、もっともっと「ロー・コンシャス・カンパニー本来の資本主義」の普及に努めなければならない、というのである。そして、そのために著者たちは頑張っているのだ、と。

Ⅶ. お わ り に

基本的な私の書評は、この本があまりにあつけらかんと無邪気に資本主義を信仰していること、資本主義に対するあらゆる批判に対しては「オーセンティック・キャピタリズム本来の資本主義」ではない現実の資本主義が悪いのだ、つまり、悪いのは「資本主義の突然変異体」であって「オーセンティック・キャピタリズム本来の資本主義」ではない、という言い逃れに終始していることの指摘であった。

最後に、若干の気になる個々の点についての指摘をしておく。

まずは、「ベルリンの壁崩壊」に象徴されるように——「天安門で起きた中国民衆の劇的な反乱は失敗に終わったが」——共産主義体制は次々と倒れた。これは、「資本主義と民主主義が、このすさまじい闘いに決定的な勝利を収め」(p.36)た、という著者たちの認識について。詳細は、私の「資本主義は勝利したのか？」(本誌第42巻第5号 1992年3月)、「健全な資本主義という幻想」(同第49巻第5号 1999年1月)、「システムとしての資本主義を問い直す」(同第49巻第6号 1999年3月)などで展開しているが、資本主義と民主主義とはレベルの異なる術語である。資本主義イコール民主主義ではないのである。著者たちは、この通俗的な誤解の上で——知ってのことか、あるいは、知らないでかは、いまは問わないで置く——議論を展開している。

もう一点。著者たちは、「今や、情報に関しては平等主義がかつてないほどに広がっている。今日はどんな問題についても、普通の人々がいつでも、どこでも、ほとんど無料で事実上無限の情報に接することができる。二〇年前には世界一の金持ちでさえこれほどの情報を得ることはできなかった。そして現在は、とてつもない透明性の時代が始まっている。大半の企業・政府の活動や方針はすぐに人々の知るところとなってしまう。」(pp.36～37)と手放しであるが、そんなことは断じてあるはずがない。というのは、情報の価値はそれが独占されればされるほど高まるといふ本姓からして「とてつもない透明性」はあり得ないからである。それは幻想であり、そして、単なるプロパガンダでしかない。その詳細は、私の『電脳拒否宣言』(技術と人間 1998年)で展開している。